

若林強斎の祭政一致論

齋藤 公太

「祭」と「政」の同訓に基づき、日本における祭祀と政治の一致という伝統、すなわち「祭政一致」を主張することは、南北朝時代の北畠親房にさかのぼる。もともと、親房において「祭政一致」は必ずしも積極的な意味を持つておらず、祭政一致論を盛んに唱えたのは近世の儒者たちであった。近世の祭政一致論は、東アジア全体における朱子学の普及がもたらした結果の一つであったともいえる。

近世の儒者の中でも盛んに祭政一致論を唱え、それを理論的に深化させたのは、朱子学と神道の「妙契」を探究した垂加神道の人々であった。とりわけ祭政一致について詳細に論及しているのは、山崎闇斎の再伝の弟子であり、浅見綱斎の高弟である若林強斎(一六七九—一七三二)である。今回の発表では、従来の研究において概括的にしか触れられていなかった強斎の祭政一致論について、時系列順にまとめつつ考察した。

『強斎先生雑話筆記』巻一に見られる享保四年(一七一九)時の発言では、強斎は神道の本質を朱子学と同一のものとしつつも、その本質が失われた呪術的な神道を排撃し、祭祀と政治の無媒介的な結合を批判する。『神道夜話』に記された享保八年(一七二三)時の言葉では、政治の本質は神明に對峙する際の心をもつて行うことにあるとし、祭祀と政治の一致を説いている。すなわち強斎は朱子学的な心法を媒介として祭祀と政治を同一視したのである。日本においてかかる「祭政一理」の中核となるのは天皇であった。

享保九年(一七二四)の神道相伝を経て強斎の祭政一致論は深化を見せる。享保十年(一七二五)の講義である『神道大意』では、現実政治に関与せず、神を祭り「天下ノ太平、万民ノ安穩」を祈る天皇の有り様を、『中庸』の「篤恭にして天下平らかなり」という文言によってとらえている。朱熹の『中庸章句』では、この文言は天子の「不顯の徳」による統治を意味しているとされるが、強斎はそのような天子の姿を天皇に見出し、かかる「不顯の徳」を受けて万民が道を実践することが「面々分上の祭政一理」であるとした。

当時漸次的に朱子学が普及しつつあったとはいえ、近世日本社会におけるその政治的影響力は限定的なものであった。日本の儒者には現実政治に関与するための社会的基盤が欠けていたからである。また、將軍の権力下にある天皇が無力な存在であったことは強斎もよく承知していた。こうした状況をふまえ、強斎は不可視の存在である近世の天皇に「不顯の徳」を見出し、その「祭政」のもとで各人がささやかながら道を実践することに唯一の希望を託していた。いわば、強斎の祭政一致論は不可視の天皇が各人の道の実践を保証するという構造になっている。だが、依然として近世社会における天皇の無力さは蔽うべくもなく、その祭政一致論はいまだ構造的な危うさを抱えていた。

『中臣祓師説』(享保十五年)や『守中潮翁神代卷講義』(享保十六年)に見られる最晩年の祭政一致論は、しばしば「神皇一体」との関連で説かれる。そこでは天皇は神に守られた存在であるとされ、「神皇」に罪を告白することで各人の穢れが祓

われ、「祭政一理」が実現すると述べられている。このように、最晩年の祭政一致論では天皇の神格化が進むことにより従前の議論の弱点が克服されている。しかしそれは明らかに朱子学からの逸脱であり、「神皇」に対する独特の信仰は北畠親房や山崎闇斎の思想とも異質なものかもしれない。こうした神道思想の深化と天皇神格化の理由は様々に説明できようが、本発表で見てきたように、近世日本の歴史的条件下において朱子学の実践を追求したことによる一つの帰結としても理解できるのではないだろうか。

本居宣長における儒仏伝来の「記述」

森 和也

本居宣長が『日本書紀』ではなく『古事記』によって「古道」を明らかにしようとした意図が那邊にあるかについては、『古事記伝』(以下『伝』)評価の核心に触れる問題であるだけに、古くから様々に議論がなされてきた。宣長の儒教と仏教に対する言及に着目することで、宣長が『古事記』を選択した理由について、一つの新しい視点を付け加えたい。

『日本書紀』と比較した場合、『古事記』には、儒教・仏教に関する記事の量が著しく少ない。仏教では、『日本書紀』欽明紀にある仏教伝に関する記述は『古事記』にはなく、また、聖徳太子に対しても用明天皇の御子として名が上がるだけである。『古事記』の世界において仏教は存在していない。儒教・仏教の影響を拭い去った「古道」というものを想定する宣長の見取図からすれば、『古事記』には、仏教の姿がないことは都

合が良かったのではないだろうか。また、『伝』の聖徳太子に対する注釈を見ると、宣長の意図的な仏教隠しが『伝』から読み取れる。『伝』では、「上宮之厩戸豊聡耳命」という名前の注釈に言葉が費やされ、仏教に関する記事は、『日本書紀』推古紀の聖徳太子伝を引用するなかで、慧慈に仏教を学んだことと、割注に引く『日本霊異記』の文中にわずかに存在するが、あくまで名前の注釈の流れで引用されるだけであり、『日本霊異記』から引く「勝鬘法華等經疏」などは、勝鬘經・法華經の講説として推古紀に見えているにもかかわらず、この箇所は注本文には引用されない。聖徳太子の仏教信仰については、批判すら抑制されている。宣長が歴史の上から意識的に仏教を排除しようとしていたことは、『統紀歴朝詔詞解』で、「三宝乃奴止仕奉流」の八文字にあえて訓読を施さなかったことも証左となり得るだろう。

一方、儒教について見てみると、応神朝の儒教伝来の記述では、『日本書紀』には無い『論語』と『千字文』の書名が『古事記』にはあり、『古事記』の方が詳しいが、『日本書紀』に見える継体朝での五経博士の来日の記事が無いなど、全体的には儒教においても『古事記』は言葉少なである。『伝』では、この応神朝の儒教伝来の記事の注釈において、応神朝に『千字文』の伝来があり得ないことを考証し、にもかかわらず『千字文』が記載された理由について言葉を尽くして考察しているが、『論語』については、『千字文』の考証の文脈で、「論語はさることなれども」と簡単に触れるだけであり、儒教の經典の伝来ということについて掘り下げた言及はなされていない。宣長の注釈